

『現代中東問題を読み解く』

後藤 晃



本書は、神奈川大学アジア研究センターが企画した公開講座『現代の中東問題を読み解く』にはじまる。講座は中東の地域研究の専門家7名を講師に2015年5月半ばから7週に渡って開かれ、中東の現状を分析、解説する形で進められた。定員を上回る聴講希望者があり、中東問題に対する市民の関心の高さをうかがわせた。

当初、講演の内容をまとめて早期に刊行することを考えていた。しかしその後、シリア内戦はIS（イスラム国）も絡んで混迷を深め、また産油国の政治経済に影響する石油価格の下落、イランとアメリカの核合意などなど、中東地域の政治状況が目まぐるしく変化した。混乱は中東地域のみならず世界にも政治の枠組みが大きく変わるほどの影響を与えている。シリアからヨーロッパに向かう大量の難民はEU諸国の右旋回に弾みをつけた。住民のアイデンティティーをめぐる危機がポピュリストによって利用され、イギリスのEU離脱に象徴される統合から分裂への流れに掉さした。

こうした激しい変化は中東の「現状」を読み解くことをより難しくし、刊行は遅れることになったが、時間を要したもう一つの理由に執筆者が講演の内容をさらに発展させ、中東問題の本質を問う作業を進めたことがある。情報を提供することは難しいことではない。しかし、問題の根源に遡って本質を明らかにするのはそう簡単ではない。歴史を遡り因果の糸を手繰る必要もあるからである。執筆者はそれぞれに専門の研究領域をもつ研究者であり、情報分析だけでは済まなかった。

チュニジアにはじまりエジプトなどアラブ地域に波及した「アラブ革命」が起こってから6年の歳月が流れた。民主化を求める大衆の闘争によってチュニジアではベン・アリ政権が倒れ、エジプトではムバーラク政権が打倒され、さらにリビア、ソマリア、シリアなどに波及した。このアラブ世界で起こった民主化闘争を欧米日本のマスコミは当初「アラブの春」と呼んだ。しかし、民衆闘争はその後に暴力によって弾圧され、リビアやシリアでは非暴力の抗議運動が武装闘争に移行、シリアでは激しい内戦となって多くの難民が生まれる事態に及んだ。

本書では、こうした混乱の要因を中東の構造的な問題以上に外部からの介入が大きかったことが検証されている。地政学上の位置や石油資源の存在さらに覇権主義がからんだ外部の介入が中東の安定と自律的な発展を妨げてきた。政府と反政府勢力に向けた欧米・ロシア・トルコ、さらにサウジアラビアやイランの外部からの軍事支援は代理戦争の様相を示し、混乱をさらに大きくした。具体的には、内戦を長期化させ多くの難民を生み出したことに加えて、内戦の中でIS（イスラム国）などの過激なジハード（聖戦）主義者が勢いを増し、さらにスンナ派とシーア派の対立が煽られ、宗教的マイノリティーを差別し抑圧する宗教主義が強まった。混乱は収まるどころかシリアやイラクまたリビアでは国が溶解してしまっように見える。エジプトも当初の熱気は冷め、流動化していた政治は軍部が政権を握ったことで革命前に逆行し民主化のプロセスが見えない状態が続いている。

中東から遠い日本にいて今日の中東問題を理解するのは簡単ではない。それは中東の政治システムが日本と異なることに加えてイスラムや民族が政治を動かす大きな要因となっていることによる。国民国

家も歴史的に必然性をもって国境が引かれた訳ではなく西欧列強の政治的軍事的意図で線引きされた人工国家が多く、国の形が日本とは異なる。

本書は中東問題を正しく認識し理解を深められるように二部構成になっている。第一部は総論の形をとり、現代中東問題を読み解く上での近代史、国際政治、経済の3つの側面からアプローチし、第二部で各国と地域の現状が紹介され分析が行われている。目次の構成は以下のようである。

第一部 中東を読み解く三つの鍵

- 第1章 中東近代史のもう一つの見方
- 第2章 中東地域における現代国際政治
- 第3章 中東諸国が抱える経済問題

第二部 各国／地域の現状と分析

- 第1章 エジプト—革命の5年間
- 第2章 パレスチナ／イスラエル
—世界史の中のオスロ合意「近代のプロジェクト」の挫折
- 第3章 シリア—内戦と多民族・多宗教問題
- 第4章 イラク—戦後統治の失敗から「イスラーム国」の台頭へ
- 第5章 イラン—政治の底流にある諸派閥攻防の歴史と展望
- 第6章 トルコ—創造的破壊者としての公正発展党

内容を簡単に紹介すると、総論である第一部では、1章で、アラブ革命の5周年を振り返り、域外からの介入、旧体制のエリートの反撃、イスラム運動の挑戦の3つの動きが絡み合うかたちで民衆の革命が潰されてきたことを検証している。

2章では、中東地域の国際政治に焦点を当て、アクター（国家、非国家主体、域外の大国）、中東政治の構造およびシステムの3つの視点から現代の中東の政治状況を国際的視点から俯瞰している。

3章では、中東の政治変動と基底において関係する経済に焦点を当て、経済自由化、石油、ポピュリズムをキーワードに経済問題が政治情勢に及ぼしてきた影響を主要4か国について論じている。

各論である第二部では、1章（エジプト）で、エジプト革命には、若者勢力・軍・ムスリム同胞団の3つの主役がいたが、結局「革命の行程表」というシナリオを描いたのは軍であったことを明らかにしている。

2章（イスラエル／パレスチナ）では、和平協定であった1993年のオスロ合意はすでに破綻しており、パレスチナ独立国家建設の樹立は見果てぬ夢になったのかを世界史の中で考察している。

3章（シリア）では、シリア内戦を、独裁政権の弾圧、欧米・ロシア・トルコ・サウジ・イランが絡む代理戦争、イスラム過激派の跳梁、シリアの多民族・多宗教の多層化した社会との関連で分析している。

4章（イラク）では、様々な宗教・宗派、民族を抱えたイラクは将来どのような形で統治されていくのか、イラク戦争後の政治の流れを振り返り、今後の課題を考えている。

5章（イラン）では、宗教イデオロギーの強い独特の政治制度をもつ国であり、この政治体制が国内政治や経済を規定し国際関係に影響を及ぼしてきた。政治の底流にある諸派閥攻防の歴史をたどり、こうした特徴を持つ国の将来を展望している。

6章（トルコ）では、2002年に単独与党となって政権を握っている公正発展党に焦点を当て、国是の一つである世俗主義、クルド問題、外交に与えたインパクトについて検討している。

本書は現代の中東問題を解説したものだが、執筆者の多くは理解を深めるために歴史を遡って記述しており、近現代の中東史としても読むことができるであろう。

（ごとう あきら 神奈川大学客員教授）